

受 験 番 号

国

語

(100点 60分)

(2019年度 A - 1)

注 意 事 項

- 1 試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子の表紙の受験番号欄に受験番号を書いてください。
複数の受験番号がある場合、受験票に記載されているメイン受験番号を記入してください。
- 3 この問題冊子は表紙を除き、15ページです。
- 4 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせてください。
- 5 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、正しく記入してください。
 - ① 氏 名 欄 漢字氏名を記入してください。
 - ② 科 目 名 欄 「国語」と記入してください。
 - ③ 受 験 番 号 欄 受験票に記載されているメイン受験番号を記入し、その下のマーク欄に、正しくマークしてください。
- 6 受験番号が正しく記入されていない場合は、採点されないことがあります。
- 7 解答は、解答用紙の解答マーク欄にマークしてください。
例えば

20

 と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように20の解答マーク欄の③にマークしなさい。

(例)

解 答 マ ー ク 欄											
20	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⊕

解答マーク欄に複数のマークをすると、不正解になります。訂正するときは消しゴムできれいに消して、書き直してください。

- 8 問題冊子の余白等は適宜利用してもかまいませんが、どのページも切り離してはいけません。
- 9 不正行為について
 - ① 不正行為に対しては厳正に対処します。
 - ② 不正行為に見えるような行為が見受けられた場合は、監督者が注意します。
 - ③ 不正行為を行った場合は、その時点で受験を取りやめさせ退室させます。

国

語

(
解答番号

1

}

34

)

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～問12)に答えなさい。

二〇一五年一〇月より刊行が始まった『君波講座 現代』(全九巻)が、この二月に完結した。編集委員の一人として、この講座を世に送ったねらいと意味を、現代社会についてのジャッカン^aの社会学的考察を含めながら、論じておこう。

この講座を始めるとき、われわれ編集委員は、その趣旨をこう述べた。この講座の目的は、現代社会が直面している二つの相互に関連しあっている可能性を克服することにある、と。第一の可能性は、社会の全体像を把握することの不可能性である。〈われわれ〉は何者なのか。〈われわれ〉が所属するこの〈世界〉は、どのように特徴づけることができるのか。こうした問いに〈われわれ〉は答えをもっていない。第二の可能性は、第一の可能性を規定する不可能性、つまり認識の枠組みの不可能性である。(1)

ここでは、この『講座』の意義を明確にするために、二つの「不可能性」ということにイメージを与えておきたい。そのためには、今完結したばかりのこの『講座 現代』を、過去の『講座 現代』と比較してみるとよい。今からおよそ半世紀前、岩波書店からまったく同名のシリーズ『君波講座 現代』が刊行されている(全一四巻、別巻二冊)。この旧『講座 現代』の構成を概観するだけに、ごく少数の記号が、認識の空間の中で、いわばヘゲモニー^(注1)を握っていることがわかる。たとえば、第三巻は「社会主義世界の形成」と題されており、第五巻は、「資本主義の再編成」とある。そして、戦争や競争を直接に主題化した巻が五巻もある。そうである。ヘゲモニー¹的な記号は、「冷戦」だ。私がここで「ヘゲモニー的な記号」と呼んでいるのは、言語化された認識の空間の全体を特徴づけ、認識の空間の中他のすべての記号がそれに関係づけられることによつて意味をもつような特権的な記号のことである。

先に述べた現代社会における二つの不可能性とは、結局、ヘゲモニー的な記号の不在を意味する。現代社会には、ヘゲモニー的な記号が存在しない(ように見える)。この状態を、アラン・バディウ^(注2)は、巧みにも「無調世界 monde atone」と呼んでいる。これは **A** 的な隠喩である。一般には、ひとつの曲は調性をもつ。「ハ長調」「イ短調」等。「調性をもつ」とは、中心音があつて、メロディや和音がその中心音に関連づけて構成されているということだ。調性をもつことで、ひとつの曲は統一的な情感を宿することができる。しかし、音楽のゼンエイ^bでは、一九世紀から二〇世紀への転換期に、調性をもたない——すべての音を平等に扱う——無調音楽が編み出された。バディウによれば、現代社会は無調音楽にギセ^cられる。(2)

するとこの度の『講座 現代』のねらいは、次のようなことだと言ふことができる。無調世界において隠れている調性を見出すこと、と。「無調性」それ自体を支えている調性があるはずだ。それをテキシユツ^dすること。そのためには何をすればよいのか。 **B** 的に問うしかない。システムを全体として相対化し、その境界を揺るがすような問いを見つけるほかないのだ。こうして講座が、全九巻の講座が編まれた。無調の現代社会を問い究めるために、である。

以上のことを、別の角度から言い換えてみたい。それが、現代社会を「社会学する」ことにもなるからだ。

ヘゲモニー的な記号（あるいは調性）の不在は、私が案出した概念を用いて記述するならば、「第三者の審級」^(注3)の撤退である。そこから社会や世界の全体性を普遍的に見渡すことができる超越的な視点（を有していると想定されている「他者」）こそが、第三者の審級である。このような意味での第三者の審級を失ってしまった。……これは、現代社会についての標準的な特徴づけである。同じことは、さまざまに名づけられ、表現されてきた。最も普及している言い回しは、「大きな物語の終焉」^(注4)（リオータル）である。「大きな物語」とは、第三者の審級に所属すると解釈された願望、第三者の審級が欲していると想定された理想の世界（へと向かう過程）である。（3）

大きな物語の「大きさ」は、物語の内容が気宇壮大だ、という趣旨ではない。「大きな」という形容が意味していることは、社会的な一般性の大きさ、つまり広範なコンセンサスである。その社会的な一般性を保証しているのが第三者の審級だ。広く共有され、実現可能だと信じられている大きな物語が、かつてはあった。冷戦とは、結局、大きな物語の二つのヴァージョンの戦いであった。大きな物語の構成上の中心となる記号こそ、先に述べた「ヘゲモニー的な記号」である。しかし、ポストモダン^(注5)の社会では、大きな物語と第三者の審級が消え失せた。このように繰り返し喧伝されてきた。

かく現代を記述するとき、「典型」として思い描かれている人間類型は、孤独な快楽主義者、「オタク」などと呼ばれることもある個人であろう。彼または彼女は、「大きな物語」への信頼を失い、代わりに、それぞれの趣味によって特異な虚構^{ヴァーチャルリアリティ}に没頭している。彼らは、生身の他者との紐帯^{ちゆうたい}をあらかた断って個室に閉じこもっており、その代わりに、コンピュータやスマートフォンを端末とするインターネット上のヴァーチャルな交流を愛好する。第三者の審級が撤退したときの個人のあり方は、このような像によって描かれてきた。

だがここで目をこらして事態を見直してみよ。第三者の審級は、決して撤退してはいない。むしろ逆である。第三者の審級は、それまで以上に確たる仕方⁷で現前している。どこに？ 今、**C**的に描いたオタク的な個人の生のうちにも、その実例を認めることができる。第三者の審級は、インターネットとの関係としてその姿を現しているのだ。それぞれに特異な虚構の世界に没入するオタクの孤独な生が成り立つためには、個人は、その上に「普遍性」を読み込むことができるようなグローバルな世界へと広がっている（と想定されている）デジタルなネットワークに結びついている、という確信を必要とする。個人の孤独な生は、ネットワークのグローバルな広がりによって補償されており、前者の安心と安全は、後者によって維持されているのである。インターネットの形式で実現しているサイバースペース（＝仮想空間）は、新しい第三者の審級のひとつの姿である。（4）

この現代社会の第三者の審級は、社会思想のうちにも、はっきりとした対応物をもつ。^(注6)リチャード・ローティのアイロニズムや、リバタリアンの思想のうちにも、ある。ローティによれば、あるいはリバタリアンによれば、それぞれの個人が固有の夢を見たり、固有の物語を語ったりすることが可能であるためには、互いを侵害しない程度に距離を置いた私的空間を保証するニュートラルな（と見える）ルールや環境管理用の技術が必要とする。そうしたルールや技術こそが、第三者の審級である。一般的には次のようなメダイ^{メダイ}が成り立つだろう。個人が孤立しようとすればするほど、他者たちとその個人との間の安全な距離⁷を維持する第三者の審級への要請は高まる、と。（5）

先に、現代社会の「無調性」を支えている調性があるはずだ、と述べた。それぞれの個人が、自らの固有の趣味に従って「小さな物語」に没入する自由が与えられている、という点に着眼すれば、現代はまさに無調世界である。しかし、この無調世界の可能性の条件となるような第三者の審級がある。これこそ、無調性の支持基盤としての調性である。

(大澤真幸「無調社会を支える調性を問う——『岩波講座 現代』は何を目指したか』による)

(注1) ヘゲモニー＝主導権、指導的立場。

(注2) アラン・バディウ＝一九三七年～。フランスの哲学者。

(注3) 審級＝本来は、異なる階級の裁判所間の審判の順序のこと。上下の関係を表わす言葉である。

(注4) リオタール＝一九二四～一九九八年。フランスの哲学者。

(注5) ポストモダン＝主体・進歩主義・人間解放というような啓蒙の理念に支えられた近代主義の原理を批判し、脱近代を目指す考え方。また人々に共通する理念や価値観が消失し、各人がそれぞれの趣味に生きている現代的状況を指す言葉でもある。

(注6) リチャード・ローティのアイロニズム＝リチャード・ローティ(一九三一～二〇〇七年)はアメリカの哲学者。「アイロニズム」とは、自分の信念や欲求は絶対的なものではなく、その事を十分に認識すべきであるというローティの主張をいう。

(注7) リバタリアン＝リバタリアニズム(＝他者の自由を侵害しない限りにおいて、各人のあらゆる自由を尊重しようとする思想)を主張する人。

問1 傍線部 a～e のカタカナにあたる漢字と同じ漢字を含むものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

〔解答番号〕
1 5

a ジャツカン

1

- ① 就職をススめる。
- ② 初心をツラヌク。
- ③ 休暇を取ってクツロぐ。
- ④ 気持ちがユルむ。
- ⑤ 洗濯物をホす。

b ゼンエイ

2

- ① ジエイ業を営む。
- ② 社会にエイキヨウを与える。
- ③ エイダンをください。
- ④ キエイの新人。
- ⑤ 人工エイセイを打ち上げる。

c ギせられる

3

- ① レイギ正しい子ども。
- ② サギ事件が横行する。
- ③ うわさのシンギを確かめる。
- ④ モギ試験を受ける。
- ⑤ ベンギを図る。

d テキシユツ

4

- ① 間違いをシテキする。
- ② テキイを抱く。
- ③ ケイテキを鳴らす。
- ④ ブツテキ証拠を提出する。
- ⑤ 病院でテンテキしてもらう。

e メイダイ

5

- ① ダイタイ案を出す。
- ② キユウダイ点を取る。
- ③ チョウレイダイに登る。
- ④ シユダイとして取り上げる。
- ⑤ ダイタンな発言だ。

問2 空欄 A C を補うのに最も適当な言葉を、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。(同じものを二度以上選んではいけません。)

〔解答番号 A 〓 6、B 〓 7、C 〓 8〕

- ① 多角 ② 標準 ③ 抽象 ④ 戯画 ⑤ 音楽

問3 傍線部「ヘゲモニー的な記号は、『冷戦』だ」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 9〕

- ① 「冷戦」によって悪い方向に進みつつあった世界を正しい方向へ引き戻すために、さまざまな手段を用いて「冷戦」を克服する必要があったという事
- ② 「冷戦」以外の事柄は「冷戦」との関わりにおいて意味を持つようなものであるので、まず「冷戦」を優先的に取り上げなければならなかったという事
- ③ 過去の『講座 現代』の中で、戦争や競争を主たるテーマとした巻はいくつかあったが、「冷戦」を取り上げた巻がとりわけ異彩を放ち、読みごたえのあるものになっていったという事
- ④ 「冷戦」が過去の『講座 現代』全体を特徴づけるものであり、他のすべての事柄は「冷戦」との関わりにおいて意味を持つものになっていったという事
- ⑤ 先の『講座 現代』においていろいろな事象が取り上げられたが、研究者の間で最も人気があり数多く取り上げられたテーマが「冷戦」であったという事

問4 傍線部2「無調の現代社会を問い究める」とありますが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

〔解答番号 10〕

- ① 現代社会はヘゲモニー的な中心音が見当たらない無調世界なので、この状態から脱するために、社会全体を揺るがすような過激な問いかけをする。
- ② 音楽が古い調性の世界から調性を持たない最先端の世界へと進化を遂げたように、現代社会も古い形態から新しい形態へと進化することを証明する。

- ③ 現代社会は主調となる記号が見いだせない無調世界であるが、それでも無調を支えている何らかの調性があるはずなので、それを明らかにする。
- ④ 音楽ではすべての音を平等に扱う事によって新しい道を切り開いたのだから、現代社会も平等という概念を手がかりにして問題の解決を図る。
- ⑤ 現代社会はアラン・バディウの言うような「無調世界」などではなく、調性を本来的に具えており、中心になる音が存在することを考察する。

問5 傍線部3「コンセンサス」の意味として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 11〕

- ① 合意
- ② 宣伝
- ③ 運動
- ④ 情報
- ⑤ 協力

問6 傍線部4「喧伝されてきた」の意味として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 12〕

- ① 言い散らされてきた
- ② 言いはやされてきた
- ③ 言いふくめられてきた
- ④ 言い返されてきた
- ⑤ 言い伝えられてきた

問7 傍線部5「彼または彼女は、『大きな物語』への信頼を失い」とありますが、「大きな物語」の「大きさ」の裏付けとなるものは何ですか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号

13

- ① スケールの大きさを具えていること
- ② 大衆的でわかりやすいものであること
- ③ 世界的に認められ有名なものであること
- ④ 社会的な一般性が保証されていること
- ⑤ 古くから歴史的に語り継がれてきたものであること

問8 傍線部6「必要とする」とありますが、「必要とする」の主語を、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号

14

- ① 特異な虚構の世界
- ② オタクの孤独な生
- ③ 個人
- ④ グローバルな世界
- ⑤ デジタルなネットワーク

問9 傍線部7「安全な距離」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号

15

- ① 広げれば広げるほど孤立を完全なものにすることができ他人との間の距離
- ② 縮めようと思えばいつでも縮めることのできるお互いの心理的な距離
- ③ 互いに近づきようがないくらい隔絶した個人と個人との間の距離
- ④ お互いがそれぞれの私的空間から出て気軽に交流できるようなくわずかな距離
- ⑤ それぞれが孤独な生を営むためのつかず離れずの距離

問10 傍線部8「無調世界の可能性の条件となるような第三者の審級がある」とありますが、この「第三者の審級」の説明として最も適当なものを、次の

①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 16〕

- ① 無調世界である現代において調性を取り戻すために必要な、生身の他者とのつながり
- ② 個人の孤立した生を補償するとともに、その安全性を維持している、インターネット上の仮想空間
- ③ 個々人が自室に閉じこもり虚構の世界に没入する風潮を生み出した、デジタルネットワーク
- ④ 人々が固有の夢を見たり、固有の物語を語りたりすることを可能にする、各自の「小さな物語」
- ⑤ 無調の現代社会ならではの、孤独な快樂主義に代表される、ある種の価値観

問11 本文から次の文が脱落しています。本文中の(1)～(5)のどこに戻すのが最も適当ですか。後群の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

〔解答番号 17〕

中心音(ヘゲモニー的な記号)が見当たらないからである。

- ① (1)
- ② (2)
- ③ (3)
- ④ (4)
- ⑤ (5)

問12 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 18〕

- ① 「第三者の審級」は現代の無調世界から撤退したわけではなく、わずかにオタク的な生の中に形だけ残っている。
- ② 「大きな物語」の消失を危ぶむ時期があったが、各自が「小さな物語」を発見することで「大きな物語」の必要性はかなり薄れた。
- ③ 過去の『講座 現代』を検討してみると、中心となる特権的な記号の存在は確認できたが、「大きな物語」に該当するものは見当たらなかった。
- ④ 中心音があつてしつかりと構成され、まとまりのある情感を生み出す調性音楽の方が、無調音楽よりも価値が高い。
- ⑤ 「大きな物語」への信頼が失われ、個人は孤独な生を送っているように言われる現代社会にも、ヘゲモニー的な記号は存在する。

第2問 次の文章は、フランスの作家アルベール・カミュ（一九一三～一九六〇年）の小説『ペスト』の読後感です。これを読んで、後の問い（問1～問9）に答えなさい。

『ペスト』のことを考えずにはいられない。読んでいる間はそんな気分だった。食事をするのも面倒だった。『ペスト』のこと以外考えたくないとさえ思っていた。一方で、もう『ペスト』のことは一切考えたくないと思う時間もあって、登場人物たちが、オランという市が、そしてペストがどうなつてゆくのかばかり考えている期間の谷間に、これ以上は読みたくないという瞬間がやってきてやつと読むのをやめるといふ、とても不思議な読書だった。なんだろう。これは病禍にも似てはいないだろうか。ペストのことは知らないけれど、病気になるって、いつ治つてくれるのか、自分はどうなるのかということばかり考えながら、もうこんなことを考えるのはうんざりするともいうような。

一九四二年四月十六日、アルジェリアの港街オランで三十代の医師リウーが、診察室から出て階段口の真ん中で死んだネズミにつまずいたことに端を発するペストの流行は、（イ）街全体が世界から隔離されるといふ状況に発展してゆく。おびただしい死者が積み上がっていくことに決定的な救済など与えられない中、街の人々は孤立状態の街に閉じこめられ、死と隣り合わせの日々を送る。あらずじによると、ペストはナチスの寓意であるといふようにも読めるとのことだけれど、そのまま病気としてのペストとして読むにしても、疫病が猛威を振るう閉鎖された街というものがどういふ状態かについての思考実験としてもとても考え抜かれている。船舶が入つてこず、街を出ることを禁じられた自動車は堂々巡りを始め、食糧補給は制限され、ガソリンも割り当て制になるといふ不活発な状況の中、商店や事務所の休業で暇になった人たちがカフェに集まり、映画館が大もうけするといふ奇妙な様子を、カミュはただそこにあるモラトリアムとして淡々と描く。状況が状況なので、楽しいといふと語弊があるのだが、非日常を日常として暮らすことになった人たちがどのように振る舞うかという観察は、それだけでも充分興味深い。

そのような、ペストという不条理を過ごすことになった街を描く冷静な手付きは、登場人物たちの中庸な姿にも表れている。医師のリウーは、ひたすらに患者の間を渡り歩き、目の前の仕事をこなすことに尽力する。リウーの貧乏な患者である役人のグランは、役所の仕事をしながらリウーに協力する。悠々と暮らす旅行者のタルーもまた、オランに暮らす人々のニッチな観察に興じながらも、ペストの猛威の中でリウーに手を貸すことになる。記者のランベールは、恋人に会いたいがために何度か脱出を試みるのだが、結局は街に留まり人々を助けようと決める。彼らは、常に疲れ果てたような状態ながら、ペストの脅威に諦めることなく抵抗する。さまざまな出自を持ち、人生に悔いや屈託を抱えながらも、騒ぎ立てず静かにペストと戦う登場人物たちのことが、（ロ）知っている人のことのように心配になつてきて、食事で読書を中断するのも惜しいくらいだった。彼らはペストの渦中でどうなつていくのか。端的に、生き残れるのだろうか？ こんなに普通の人たちが？

ペストに抗う登場人物たちには、小説的な意味での色気のようなものがほとんど付与されない、植物的とも言つてもいいぐらい抑揚のない人々なのだが、

だからこそ、自分は彼らが心配になったのかもしれない。リウーはペストをくい止められるほどの名医というわけではなく、目の前の死にゆく患者に對峙し手当てをすることしかできないのだが、そのことから決して逃げない。神を信じていないというリウーは、タルーに、ならばなぜそんなに献身的にやるのかと問われ、「自分が全能の神というものを信じていたら、人々を治療することはやめて、そんな心配はそうなれば神に任せてしまおう」と答える。ペストを「際限なく続く敗北」³と言い、街の人々の多数の死に立ち会いながらもそれに慣れることのないリウーからは、強い意志を持ちながらも生身である人間の像が見受けられる。

どこか余裕を感じさせる旅行者タルーは、(ハ) 先の段階まで出自のわからない謎の人物である。ペストが蔓延する街で保健隊を組織することをリウーに提案し、それまでの有閑な様子から一転してペストの前線に赴くことを選ぶ。父親が次席検事だったというタルーは、論告の見学に呼ばれ、そこで父親が死刑宣告をする様子を目撃し、求刑される男もまた生きているのだと理解した瞬間から人生が一変してしまう。「われわれは人を死なせる恐れなしにはこの世で身振り一つもなしえないのだ」ということを知ったタルーは、人を死なせたり死なせることを正当化したりする一切のものを拒否すると決心する。

確信をもって行動するタルーとは対照的に、貧乏な五十代の役人のグランは、特に動機らしい動機はないまま、(ニ) ペストに関係する人々の統計を取り続ける。なすべきことをなすまでという態度の彼は、ペストの中にありながら、家出した元妻のことを考え、ペストが終息したら一週間休みを取って、仕事の合間に書いている小説を書きたいと考えている。なんだったらグランは、ペストのことなんかより小説のことを考えたいのだとも読める。世の中が大変だから自分もできることをしようというだけに見えるグランは、さまざまな登場人物の中でも最も凡庸な人間であるにもかかわらず、おそらくはいちばん強烈な印象を残す。

ペストとは、人間がかこつ理不尽な運命の寓意であり、本書はそれに対する抵抗の本質を描いている。⁴ ペストがなければただの人だったかもしれない普通の人々は、これだけの強さを隠し持っていて、それを特別なことと誇りもせず、疲労して奪い取られながらも目の前のことに立ち向かう。神にも愛にも依らない、この強さは何なのだろう。登場人物たちがペストのことを考えられずにはいられないように、読者であるわたしは、リウーたちのことを考えずにはいられなかった。これを切り抜けて欲しい、とほとんど友人に對するように願っていた。

ペストの中にいる人々の行く末は、誰もが現実的な姿であるからこそ、まったくどうなるかわからない。それは、現実のなりゆきがよくわからないことにととても似ている。ペストの先で、彼らは何をつかむのか。ある人物のある喪失の直中で記述される「ただ、ペストを知ったこと、そしてそれを思い出すということ、友情を知ったこと、そしてそれを思い出すということ、愛情を知り、そしていつの日かそれを思い出すことになるということ」という一文には、人間が生きる意味が凝縮されている。世界や人生から奪われ続ける不条理の中で「思い出すこと」の価値が刻みつけられる。^d 感動的な小説だと思ふ。そうとしか言いようがない。

(注1) ペストはペスト菌による伝染病で、ネズミやノミなどを媒介して人にうつる。致死率が高い。

(注2) モラトリアムは社会的義務や責任を猶予されている期間。

(注3) ニッチは「すき間」の意。ここでは「普通では気づきにくい」といったような意味。

問1 傍線部a～dの漢字と組み合わせる語ができるものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

〔解答番号 a 19、b 20、c 21、d 22〕

- | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| a | 諦 | ① | 結 | ② | 改 | ③ | 款 | ④ | 贈 | ⑤ | 念 |
| b | 赴 | ① | 任 | ② | 慮 | ③ | 養 | ④ | 報 | ⑤ | 請 |
| c | 依 | ① | 鉢 | ② | 住 | ③ | 縮 | ④ | 願 | ⑤ | 植 |
| d | 刻 | ① | 寒 | ② | 先 | ③ | 相 | ④ | 示 | ⑤ | 似 |

問2 空欄(イ)～(ニ)を補うのに最も適当な言葉を、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。(同じものを二度以上選んではいけません。)[解答番号 イ 23、ロ 24、ハ 25、ニ 26]

- ① かなり ② やがて ③ なおさら ④ まるで ⑤ ひたすら

問3

傍線部1「病禍にも似てはいないだろうか」とありますが、『ベスト』を読んでいる時の筆者のどのようなところが似ているのですか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 27〕

- ① そのことを考え続けたいと思っているのに、頭が混乱して考え続けられなくなるところ
- ② 気にしなくても済むはずなのに、ある点が妙に気になり考え続けてしまうところ
- ③ そのことが気になって仕方がないのに、そこから身を引き離したくなる場所
- ④ 考えたくないことはかりが頭に浮かんできて、疲れ果ててしまうところ
- ⑤ 考えたくないと思っけていても、つい考えようという気になってしまうところ

問4

傍線部甲「語弊」、乙「屈託」の意味として最も適当なものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

〔解答番号 甲 28、乙 29〕

甲 「語弊」

- ① 直接的すぎるために、おもむきに欠ける表現
- ② 言葉の使い方が適切でないために、誤解を招く表現
- ③ 言葉があまりに単純であるために、言葉足らずな表現
- ④ 言葉が平易すぎるために、印象が薄い表現
- ⑤ 逆説的であるために、意味が通じにくい表現

乙 「屈託」

- ① 何事も思い通りにいかず、いらいらすること
- ② 解決すべき問題が山積して、おろおろすること
- ③ あることが気にかかって、くよくよすること
- ④ 事態がどうなるのかわからず、はらはらすること
- ⑤ 重大なことが身にせまって、そわそわすること

問5 傍線部2「中庸な姿」とは、ここではどのような姿のことですか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

〔解答番号〕
30

- ① 地道に黙々と自分の務めを果たそうとする姿
- ② 普通の人間ゆえになすすべもなく傍観する姿
- ③ 自分を犠牲にしても他者を助けようとする姿
- ④ 災いが終息するまでじつと耐えようとする姿
- ⑤ 英雄のように敢然と難関を突破しようとする姿

問6 傍線部3「際限なく続く敗北」という表現には「リウー」のどのような心情が込められていますか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

〔解答番号〕
31

- ① ペストによって簡単に破滅してしまう人間のもろさに対するあきらめとむなしさ
- ② 多数の死に立ち会いながらも、いつまでも死を恐れ続ける自分自身への嫌悪と情けなさ
- ③ 人間の力では到底立ち向かえない、凄まじい破壊力を持ったペストに対する恐れと驚き
- ④ 死んでいく人々を目の前にしながらどうすることもできない悔しさともどかしさ
- ⑤ 神に頼ることもできず人間の力でペストに立ち向かわねばならない絶望と無力感

問7 傍線部4「本書はそれに対する抵抗の本質を描いている」とありますが、筆者はどのような点が「抵抗の本質」であると考えているのですか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 32〕

- ① ペストという暗い現実には意気消沈することなく、明るく振る舞っている人々の姿
- ② ペストという共通の敵に向かってともに立ち向かう人々の団結力
- ③ ペストという不条理に対して、静かに抵抗を続ける普通の人々の強さ
- ④ ペストという嫌な思い出であっても、いつまでも記憶に刻み付けておこうとする人間の意志の強さ
- ⑤ ペストに象徴される理不尽な運命の中でこそ生きる意味が発見できるという真理

問8 『ペスト』の作者カミュはノーベル賞作家ですが、日本のノーベル賞作家、川端康成の作品を、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

〔解答番号 33〕

- ① 人間失格
- ② 暗夜行路
- ③ 古都
- ④ 仮面の告白
- ⑤ 三四郎

問9 登場人物の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 34〕

- ① 確信を持って行動するタルーとは対照的に、貧乏な役人グランはペストと関わろうとせず、無為な生活を送っている。
- ② 医師リウーは、全能の神に頼り切って治療への熱意が薄れてしまうことを恐れ、信仰を持つことを戒めていた。
- ③ ペストが猛威をふるう中でも、家出した元妻や執筆中の小説のことを気にかける役人グランの人は、親しみやすい印象を与える。
- ④ ペストに対して傍観者の態度を崩さないタルーやグランと違って、医師リウーはペストと真剣に向き合い、誠実な態度を取り続けた。
- ⑤ 旅行者タルーがペストの前線に赴くことを決心した背景には、父親が死刑宣告を下すのを目撃するという経験があった。

